

# 青い星の国へ

小川未明

青空文庫



デパートの内部は、いつも春のようでした。そこには、いろいろの香りがあり、いい音がきかれ、そして、らんの花など咲いていたからです。

いつも快活で、そして、また独りぼつちに自分を感じた年子は、しばらく、柔らかな腰掛けにからだを投げて、うつとりと、波立ちかがやきつつある光景に見とれて、夢心地でいました。

「このはなやかさが、いつまでつづくであろう。もう、あと二時間、三時間たてば、ここにいる人々は、みんなどこかにか去って、しんとして暗くさびしくなってしまうのだらう。」

こんな空想が、ふと頭の中に、一片の雲のごとく浮かぶと、急にいたたまらないようにさびしくなりました。

そこを出て、明るい通りから、横道にそれますと、もう、あたりには、まったく夜がきていました。その夜も、日の短い冬ですから、だいぶふけていたのであります。そして、急に、いままできこえなかった、遠くで鳴る、汽笛の音などが耳にはいるのでした。

「まあ、青い、青い、星！」

電車の停留場に向かつて、歩く途中で、ふと天上の一つの星を見て、こ  
ういいました。その星は、いつも、こんなに、青く光っていたのであろうか。それとも、  
今夜は、特にさえて見えるのだらうか。

彼女は、無意識のうちに、「私の生まれた、北国では、とても星の光が強く、青く  
見えてよ。」といった、若い上野先生の言葉が記憶に残っていて、そして、いつのまに  
か、その好きだった先生のことを思い出していたのであります。

すでに、彼女は、いくつかの停留場を電車にも乗ろうとせず通りすごしてい  
ました。ものを考えるには、こうして暗い道を歩くのが適したばかりでなしに、せつかく、  
楽しい、かすかな空想の糸を混乱のために、切ってしまうのが惜しかったのです。

先生は、年子がゆく時間になると、学校の裏門のところ、じつと一筋道をな  
がめて立っていらつしやいました。秋のころには、そこに植わっている桜の木が、黄色に  
なつて、はらはらと葉がちりかかりました。そして、年子は、先生の姿を見つけると、  
ご本の赤いふろしき包みを打ち振るようにして駆け出したものです。

「あまり遅いから、どうなさったのかと思つて待つていたのよ。」と、若い上野先生は、  
につこりなさいました。

「叔母さんのお使いで、どうもすみません。」と、年子はいいました。窓から、あちらに遠くの森の頂が見えるお教室で、英語を先生から習ったのでした。

きけば、先生は、小さい時分にお父さんをおなくしになつて、お母さんの手で育つたのでした。だから、この世の中の苦労も知つていらつしやれば、また、どことなく、そのお姿に、さびしいところがありました。

「私は、からだだが、そう強いほうではないし、それに故郷は寒いんですから、帰りたくはないけれど、どうしても帰るようになるかもしれないのよ。」

ある日、先生は、こんなことをおつしやいました。そのとき、年子は、どんなに驚いたでしょう。それよりも、どんなに悲しかったでしょう。

「先生、お別れするのはいや。いつまでもこつちにいらしてね。」と、年子は、しぜんに熱い涙がわくのを覚ええました。見ると先生のお目にも涙が光っていました。

「ええ、なりたけどこへもいきませんわ。」

こう先生は、おつしやいました。けれど、先生のお母さんと、弟さんとが、田舎の町にいらして、先生のお帰りを待つていられるのを、年子は先生から承つたのでした。また、先生のお母さんと、弟さんは、その町にあつた、教会堂の番人をなさつ

ていることも知ったのでした。

だが、ついにおそれた、その日がきました。せめてもの思い出にと、年子は、先生とお別れする前にいっしょに郊外を散歩したのであります。

「先生、ここはどこでしょうか。」

知らない、文化住宅のたくさんあるところへ出たときに、年子はこうたずねました。「さあ、私もはじめてなところなの。どこだつてかまいせんわ。こうして楽しくお話しながら歩いているんですもの。」

「ええ、もつと、もつと歩きましょうね、先生」

ふたりは、丘を下りかけていました。水のような空に、葉のない小枝が、美しく差し交じっていました。

「私が帰ったら、お休みにきつといらつしやいね。」と、先生がおつしやいました。年子は、あちらの、水色の空の下、だいたい色に見えてなつかしいかなだが、先生のお国であろうと考えたから、

「きつと、先生におあいまいります。」と、お約束をしたのです。すると、そのとき、先生は年子の手を堅くお握りなさいました。

「たとえ、遠いたつて、ここから二筋の線路が私の町までつづいているのよ。汽車にさえ乗れば、ひとりでにつれていつてくれるのですもの。」

そうおつしやつて、先生の黒いひとみは、同じだいたい色の空にとまったのでした。流れるものは、水ばかりではありません。なつかしい上野先生がお国に帰られてから三年になります。その間に、おたよりをいただいたとき、北の国の星の光が、青いということが重ねて書いてありました。そして、雪の凍る寒い静かな夜の、神秘なことが書いてありました。

青い星を見た刹那から、彼女を北へ北へとしきりに誘惑する目に見えない不思議な力がありました。

とうとう、二、三日の後でした。年子は、北へゆく汽車の中に、ただひとり窓に凭つて移り変わってゆく、冬枯れのさびしい景色に見とれている、自分を見いだしました。

東京を出るときには、にぎやかで、なんとなく明るく、美しい人たちもまじっていた車室の内は、遠く都をはなれるにしたがつて人数も減つて、急に暗くわびしく見えただけでした。そのとき、汽車は、山と山の間を深い谷に沿うて走っていたのです。

「まあ、山は真つ白だこと、ここから雪になるんだわ。」

「年子は、思わずこういつて目をみはりました。」

「山を越してごらんない。三尺も、四尺もありますさかい。おまえさんは、どこから乗っていらしたの。」

黒い頭巾をかぶったおばあさんが、みかんをむいて食べながらいいました。年子は、話しかけられて、はじめて注意しておばあさんを見ました。なんだかあわれな人のようにも見え、また気味悪いようにも感じられたのです。

「東京から乗ったのです。そして、つぎのつぎの、停車場で下りますの。」  
「着くと暗くなりますの。」

おばあさんは、それぎりだまってしまいました。雪の曠野を走って、ようやく、目的地に着きました。しかし、急に思いたってきたので、通知もしなかったから、この小さな寂しい停車場に降りても、そこに、上野先生の姿が見え得ようはずがなかったのです。

手に、ケースを下げて、不案内の狭苦しい町の中へはいりました。道も、屋根も、一面雪におおわれていました。寒い風が、つじに立っている街燈をかすめて、どこからか、枯れたささの葉の鳴る音などが耳にはいりました。

どちらへ曲まがつたらいいかわからなかったの、しばらくたたずんで、きかかった人に、  
 教会堂きようかいどうの在所ありかをたずねますと、すぐわかつて、そこから三、四丁ちようのところでありまし  
 た。

雪ゆき催もよいの曇くもった空そらに、教会堂きようかいどうのどがつた三角形かくけいの屋根やねは、黒く描えがき出だされてい  
 ました。そして、かたわらの小さな家うちから、ちらちらと灯あかりがもれていました。年子としこは、刹せ  
 那つなの後に展てん開かいする先せん生せいとの楽たのしき場ば面めんを想そう像ぞうして、胸むねをおどらしながら入はいつてゆき  
 ました。

先せん生せいのお母かあさんらしい人ひとが、夕飯ゆうはんの仕度したくをしていられたらしいのが出でてこられまし  
 た。そして、年子としこが、先せん生せいをたずねて、東とうきよう京きようからきたということをおききなざると、  
 急きゆうにお言葉ことばの調子ちようしは曇くもりを帯おびたようだったが、

「それは、それは、よくいらしてくださいました。さあお上あがりなさいまし。」と、ちよ  
 うど我わが子こが遠方えんぽうから帰かえってきたように、しんせつにしてくださいました。

年子としこは、先せん生せいの姿すがたが見みえないのを、もどかしがっていると、お母かあさんは、おちついた  
 態たい度どで、静しずかに、先せん生せいは、もうこの世よの人ひとでないこと、なくなられてから、はや、半はん  
 年しあまりにもなること、そして、その節せつは、お知しらせせずにすまなかったとお話はなしなざ

れたのでした。

これをきくと、年子は、前後をわきまえ、そこに泣きくずれました。やがて、北国の夜はしんとしました。静かなのが、たちまちあらしに変わって、吹雪が兩戸を打つ音がしました。このとき、家の内では、こたつにあたりながら、年子は、先生のお母さんと、弟の勇ちゃんと、三人で、いろいろお話にふけていたのでした。

「スキーできる？」と、勇ちゃんがききました。

「ちつとばかり。」と、年子は答えた。

「じゃ、明日、お姉さんのお墓へ、いっしょにゆこう。」と、勇ちゃんが、いいました。

翌日は、いいお天気でした。ふたりは、町を距たった、林の下にあった寺の墓地へまわりました。墓地は雪に埋まっています。勇ちゃんは、木に見覚えがあつたので、この下にお姉さんが眠っていると教えたのでした。

「先生、私はお約束を守っておあいしにまいりました。それなのに、先生は、もうおいでがないのです。私は、ひとりぼっちで、さびしく帰ってゆかなければなりません。」と、年子は目を泣きはらして、手を合わせました。勇ちゃんは、ハーモニカを唇にあてて、姉さんの好きだった曲を、北風に向かって鳴らしていたのです。





# 青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 10」講談社

1977（昭和52）年8月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第6刷発行

※表題は底本では、「青《あお》い星《ほし》の国《くに》へ」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：仙酔ゑびす

2012年2月19日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

# 青い星の国へ

小川未明

2020年 7月18日 初版

## 奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail [info@aozora.gr.jp](mailto:info@aozora.gr.jp)

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>  
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。  
<http://tokimi.sylphid.jp/>